

勉強記

坂口安吾

青空文庫

大震災から三年過ぎた年の話である。昨今隆盛を極めているアパートメントの走りがそろそろ現れた頃で、又青年子女が「資本論」という魔法使いの本に憑^つかれた頃でもあった。生活の形式にも内容にも大きな転換期が訪れようとしていた。「近代」が、また「今日」が、始まろうとしていたのである。

涅槃^{ねはん}大学校という誰でも無試験で入学できる学校の印度哲学科というところへ、栗栖^{くりすあ}按吉^{あんきち}という極度に漠然たる構えの生徒が、恰^{あたか}も忍び込む煙のような朦朧^{もうろう}さで這入^{はい}つてきた。強度の近眼鏡をかけて、落着き払った顔付をしているから、何かしら考えている顔付に見えたが、総体に、このような「常に考えている」顔付ほど、この節はやらないものはない。当節の伶俐^{りとう}な人は、こういう顔付をしないのである。尾籠^{びろう}な話で恐縮だが、人間が例の最も小さな部屋——豊臣秀吉でもあの部屋だけはそう大きくは拡張できなかったということだ——で、何かしら魔法的な力によつてどうしても冥^{めい}想^{そう}に沈まなければならぬような驚くべき心理状態に襲われてしまうあの空々漠々たる時間のあいだ、流石^{さすが}に伶俐^{りとう}な人間も万策つきてこんな顔付になることがあるという話であるが、あの部屋に限って二人の人が同時に存在することが決してないという仕組みになつてゐるものだから、まったくの

話が、あんな勿体ぶった顔付を臆面もなく人前へ暴すのは不名誉至極な話である。だから当今「常に考えている」顔付をあくまで見たいという人は、精神病院へ行くよりほかに仕方がない。あすこの鉄格子のあちら側には即ち必要以上に考え深い人達が、その考え深いという性質や容貌を認められて、幸福な保護を受けているわけなのである。

然し、たまたま時世が時世であつたから、人々は栗栖按吉の考え深い顔付を見ると、さでは、という必要以上に大きな空気をぐくりと呑んで、つまりこういう顔付が刑務所の鉄格子のあちら側にある顔だと思いこんでしまふのだつた。即ち、これが「主義者づら」だと思つたのである。

生憎なことに、この男には育ちの浅いところがあり、というのは、つまり諸々の人間はすでに数万年以前にゴリラとかチンパンジーというものから人間になつてしまつたというのに、この先生の祖先だけは漸く二三百年ぐらい前にコンゴのジャングルからやおら現れてきたばかりだという面影があつた。諸君も御承知であらうけれども、ゴリラとか獅子とか墓とか、みんな考え深い顔付をしている。あの顔付は危険だ。動物園の鉄格子の外側へ野放しにして、所もあろうに涅槃大学の印度哲学科でもうひと苦勞考える苦勞を重ねるという、思い余つた挙句には突然爆裂弾を投げつけたりピストルを乱射したり、それは

もうみんなこの顔付のてあいなのである。穩良な坊主の子弟のことだからこの怪物の入学には一方ならず怯^{おび}えた形で、だから少しぐらい神経衰弱になつても試験のある学校へ行くべきであつたと今更嘆いてみたのであつたが、栗栖按吉に話しかけられることがあると、気の毒なほどひやりと顔色を変えるのであつた。が、幸いにして、読者ももとより御承知の通り、臺やゴリラはめつたに人に話しかけない

栗栖按吉という男が、この時まで、何処^{どこ}で何をしていたかということになると、これが皆目分らない。筆者も色々調べてみたが、どうも、さっぱり分らない。このとき二十一歳だつたが、それでも誰だつたかの話によると、その前年のことであるが、大菩薩峠にほど近い奥多摩山中の掘立小屋、これは伴某という往年の夢想児が奥多摩の高原を牧場にし峠から谷底まで牛でうようよさせるつもりで建てた小屋だということだが、牛なんか、まことにもつて胸がすくほど、一匹もないじゃないか。ところがこの掘立小屋を借り受けて、霧を吸い木の芽をくい、弓でもつてモモンガーを退治してすき焼をつくり、人間は一ヶ月五円でもつて樂々と生活ができるものだど悟りをひらき、勿体ぶつた顔付をして深山を散策したり本を読んだりしていた男が、どうもこの男じゃなかったかという話がある。この小屋には燈火がないから、日が暮れると、突然ねてしまうほかに手がないのだ。と、ここ

にこの男は容易ならぬことを発見した。というのは、この男が眠っている顔の真上に当る棟木に、毎晩一匹の蛇がまきついてゐるのを発見したわけである。昼になるともう姿がなくなるところを見ると、蛇のねどこに相違ないが、蛇だつてまき加減の具合や何かで悪夢を見るかも知れないからアツというまに足いや腹をすべらして墜落したら、いやこれはもう目も当てられない。この男が悟りをひらいていない証拠には、暗闇の部屋の片隅で、真剣な懊惱おうれうの様子といつたらないのである。数日後には風にまぎれて山から姿が消えてしまった。それから涅槃大学へ現れるまで、とんと見た人がなかったのである。

涅槃大学の印度哲学科には十三人の生徒がいた。栗栖按吉という場違い者を除いてみると、あとはみんな素性の正しい坊主であつた。

坊主の子供が大学へはいる。一番先に何をする。一番先に毛を延すのだ。必要以上にポマードをたつぷりつけて、ああ畜生めなんだつて帽子などという意味のはっきりしないものがあるのだらうと考えるのだ。と、容易ならぬ事件が起きた。突然栗栖按吉がクリクリ坊主になって登校したのである。これはもう革命を愛する精神だ。十二人の同級生は悲憤の涙を流したのだつた。

まったく、なさけなくなるのである。栗栖按吉は小学校の一年生と同じように大きな帽

子をかぶっている。帽子の中には新聞紙が三日分も折りこんであるのである。按吉は教室へ這入つてくると、やがて大きな帽子をぬぎ、ハンケチを持たないから、ポケットから鼻紙をだして、クリクリ坊主をふくのであった。

もつと

尤も栗栖按吉がクリクリ坊主になつたのは革命を愛する精神のせいではなかった。彼なみに、やむべからざる理由があつたためなのである。頃はすでに初夏だった。長い頭髮がなかつたら、きつと涼しいに相違ない。或朝按吉はふと考えた。その上彼は当時神経衰弱の気味があつて、頭に靄^{もや}がかかつていて、どうもはつきりしてくれない。人間はゴリラやライオンに比べれば確かに頭脳優秀であるが、ゴリラやライオンが床屋へ行くということ、を誰もきいた人がない。だから頭髮は刈るべきである。否、剃^そるべきであるのである。するともうきつと頭が良くなるのだ。——床屋の親父は迷惑した。剃^{かみそり}刀のいたむことといつたらものの三日も研^とがなければならぬだろう。そこで彼はこう言つた。

「ねえ旦那。頭に傷がつくかも知れないね。なにぶん頭というものは、唐茄子^{とうなす}ぐらいでこぼこのものがすよ。ヘッヘッヘ」

「或る程度まで我慢します」と、按吉は冷静に答えたのだつた。頭には頭蓋骨というものがある。頭を剃るということとハムマーで殴ることとは違うから、脳味噌に傷のできる憂

いはない。それを充分心得ている顔付だった。フレンド軒は横を向いて息をのんだ。この唐変木め、御好み通り傷の十は進上してお帰しするから覚えていろと心に決めてしまったのだった。

ところで栗栖按吉はここに奇怪な発見をして度を失った。というのは、毛髪を失った頭の熱いことといったら、これを一体誰が信じてくれるだろう。普通汗をかくというが、クリクリ坊主の頭からは汗が湧出し流れるのである。目へ流れこみ、鼻孔をふさぎ、口へ落ち、耳にたまり、遠慮会釈もなく背中へ胸へ流入する。これはもう頭自体が水甕みずがめにほかならないと信じるようになるのであった。

人体に於て最も発汗する場所はどこか？ 頭！ 毛髪はなんのために存在するか？ 汗をふせぐためである！ ああ。医学博士でも生理学者でも、ここまで知っている筈はない。なぜなら彼等には毛髪があるから。——まったくもって栗栖按吉の思考にうっかりこたわっていると、私まで愚かな奴だと思われてしまう。私は急いで話をすすめなければならぬ。

無意味な先生は誰かと云えば、先生よりも物識ものしりの生徒の先生と、涅槃大学の印度哲学科の先生であつた。ここの生徒は耳と耳の間が風を通す洞穴になっていて、風と一緒に

先生の言葉も通過させてしまふ。然し先生はそんなことを気にかけない。先生は喋るために月給をもらっているが、教えるために月給をもらっていないからであつた。

こんなにあつさりしたクラスに、先生の言葉を真剣にきいている生徒がいたらどうだろう。実際笑止で、気の毒なほど惨めなものだ。耳と耳の中間の風洞に壁を立て、先生の言葉をくいとめようと必死にもがいているのである。なんのためだか、てんで意味が分らない。一目見て、これはもう助からないほど頭の悪い奴だという印象を受けてしまうのである。第一こいつは何のために学校へ来ているのだろう。あまりのことに——いや、まったくだ。物質の貧困よりも、このような精神の貧困ほど陰惨で、みじめきわるものはない。そこで先生は泣きだしたいほどがっかりして、学生の自分とは何か、とか、学校の精神は何か、もつと正々堂々たれ、惨めであるな、高邁こうまいなる精神をもて、そんなことを口走りたくなるのであつた。

即ち栗栖按吉がこのようなたつた一人の惨めな生徒であつたのである。

もつと

尤もこんな男でも、たつたひとつ効能のあることが分つてきた。というのは、涅槃大学の印度哲学科というところは、時々先生がわざわざ三十分も遅れたあげく教室へ出向いてくるのに、生徒の影がひとつもないということがあるのであつた。即ち坊主の子供達は

就職の心配がないのであるし、世襲の職業に情熱や興味を持っていないからなのである。時間制の月給をいただいていらつしやる先生達は、人のいない教室に四五十分もうたたねしたり鼻唄うたったりしながら風をひいたりするのであった。そこで教務課長というような人が級長を呼び寄せて言うのである。君達の立場は分るのであるが、など同情深く口籠ったりしながら、籤引きくしびで受持ちの講義を決めるのはどういふものだね。つまり各々の講座には必ず一人の学生が決死の覚悟で出席する。いや、即ち君、これは学生の義務というものじゃからね、などと言ひ渡すのだった。と、栗栖按吉のクラスでは、まさにその心配がないではないか。

ここに坊主の子供達が御布施をくれたつて俺はでないねという講座が二つあるのである。梵語ぼんごと巴利語パーリの講座であつた。ところが栗栖按吉が何より情熱傾けてこの講座へせつせと通う。調べてみると、一日に七八時間も文法書をひっくりかえしたり辞書をめくつてゐるという話なのである。梵語の先生は大変心のやさしい方であつた。新学期の第一日新入生を大変やさしくにこにこ見渡して（この時だけは一同出席していた）梵語おつしやというものは何年おやりになつても決してうだつの上らないものでございます、と仰有るのである。四五年前大変熱心に勉強なすつたお方がありまして、今もつて私のところへここはどうだ、

これは何だ、とおききにいらつしやいます。この方は日がな一日梵語の勉強をなすつていらつしやる、ところが梵語は辞書をひけるまでがまず一苦勞、却なかなか々探す単語がおいそれと辞書から顔を出しません。いやはや梵語学者と申しまして、みんなそれぞれ怪しいものでございます、と仰有るのである。だからもう決して無理に梵語の勉強をおすすめは致しません、大変やさしく親切に言葉をつくして仰有るのだった。それでも梵語に出席しようという奴は、馬鹿でなければ礼節を知らない無頼漢のひとりであるに相違ない。

けれども先生はやさしい心のお方だから、二学期になったというのに、まだひとり生徒が出席していても、決してお怒りにならないのだった。いつもやさしく、にこにこ講義をつづけて下さるのだが、幾分薄気味わるくお思ひになるのであろう、というのは、この男が思い余った顔付をして質問したりするからで、この男が首をあげて今にも物を言いそうになると、先生は吃驚びくりなすつて目をおそらしになるのであった。

梵語とか巴利語はなるほど大変難物だ。仏蘭西語フランスは動詞が九十幾つにも変化するということだが、そんなもの梵語の方では朝めし前の茶漬けにもならないという話なのである。それというのが後年栗栖按吉が仏蘭西語の勉強をはじめたからで、このような鈍物でも、梵語の方で悩んできたあとというものは恐しい。九十幾つの変化なんていやはや、どうも、

やさしくて仕方がないのだ。覚えまいと思つていても覚えるほかに手がないという始末である。だから栗栖按吉は仏蘭西語を勉強しようという人に、こういう風に言うのであった。キ、君々々。ボ、梵語を一年も勉強してから仏蘭西語としやれてみる。あんなもの、朝めし前の茶漬けだぜ。え、おい、君。

梵語の方では名詞でも形容詞でも勝手気儘に変化する。ひとつひとつが自分勝手と言いたいほど不規則を極めている。だから辞書がひけないのである。

按吉はどこでどうして手に入れたかイギリス製の六十五円もする梵語辞典を持っていた。日本製の梵語辞典というものはないのである。これを十分も膝の上でめくっていると、膝関節がめきめきし、肩が凝^こつて息がつまってくるのであった。これを五時間ものせている目がくらむ。スポーツだ。探す単語はひとつも現れてくれないけれども、全身快く疲労して、大変勉強したという気持ちになってしまうのである。単語なんか覚えるよりも、もっと実質的な勉強をした気持ちになる。肉体がそもそも辞書に化したかのような、壮大無類な気持ちになってしまうのである。

按吉の机の上にはこれも苦勞して手に入れた「ラージャ・ヨーガ」という梵書とその英訳が置かれている。もう半年も第一頁を睨^{にら}んでいて、その五行目へ進むことができないの

だった。

先生はやさしい心のお方だから、時々按吉をいたわって下さるのである。

「いまに原書が読めるようにおなりでしょう」先生はにこにこ仰有るのだった。

「もうひと苦勞でございます」

然し按吉にしてみると、六時間も七時間も辞書をめくった挙句あげくの果に、ようやくたったひとつの単語を突きとめて凱歌がいかをあげる程だったから、この先二苦勞や七苦勞で原書が読めになるところまで行けないことを知っていた。そこで按吉の釈然とせぬ顔付を見ると、先生は更にいたわって下さるのである。

「いえいえ。梵語はもうそれで宜よろしいのでございます」先生はにこにこ仰有るのだった。「皆さんもう同じことでございます。五年十年おやりになっても、皆が皆まで引いた単語が現れてくれるというわけには却々なかなか参るものではございません」

これは又心細い話である。これでは却々釈然と笑うわけにはいかなのである。そこで先生は益々浮かない顔付の生徒を見て、益々やさしく、いたわって下さる。

「梵語はあなた、まだまだ楽でございます」先生はにこにこ仰有るのである。「チベット語ときたら、これはもう私はあなた、もう満五年間というもの山口恵海先生に習っている

のでございます。単語がもう何から何までひとつひとつが不規則変化。いまだに辞書がろくすっぽ引けは致しません。それでも帝大で講義致しております。大変つろうございます」

先生は帝大でチベツト語の講師を務めていらつしやるのであった。先生がいつもにこにこしていらつしやるので、浮かないながら、按吉は次第に心気爽快になっていた。文法もよくお知りにならず、辞書もお引けにならなくとも、帝国大学で講義していらつしやるのである。チベツト語や梵語というものは、辞書が引けず、読むことができなくとも、ちゃんとそれで読めている結果になっているのかも知れぬ。そうして栗栖按吉は辞書もろくに引けないうちに、ちゃんと原書を読んでいる気持になつてしまふのだった。

そのころ、栗栖按吉は不思議な学者と近づきになった。

この学者はゴール共和国のラテン大学校の卒業生で、言語学者であつた。東洋の二十数ヶ国語に通じているという話なのである。鞍馬六蔵という大変雄大な姓名だったが、いかにも敏捷な学者らしく、五尺に足らないお方であつた。

鞍馬先生は追分の下宿を二室占領して数千巻の書籍と共にくすぶっていたが、朝になると、大概脱脂綿にアルコールをしめして、丁寧の本を拭いていらつしやる。というのは、

最近鞍馬先生に夢遊病の症候が現れて、先生は夜中無意識のうちに歩行し、最も貴重な本箱に向つて放尿し、またお眠りになる。そこで先生は毎朝目を覚まして仰天し、アルコールで本をふく始末になるのであつたが、夢遊病はとにかくとして、貴重な書物に放尿するに至つては、どうにも悲痛なことである。要するに夜中尿意に悩まなければいいのであるから、先生は午後になるとお茶をのまず、その上部屋の四隅へ^{しゅびん} 罎を置いたが、無意識中における先生の意志はどうしても本に向つて放尿せずには納まらない。生の馬肉やオツトセイの肉などを食ひ、遂に赤蛙の生きた奴を食うところまで心をきめたが、どうしても食いたくないという意志などがあつて、相反目せる精神がひとつの人体内に於てまき起す争ひの結果は乱暴だ。食べられたくない赤蛙よりも、これを食べようという先生の方が、より以上^{あわたた}に慌しく惨澹たる悪戦苦闘をするのであつた。

孤独の先生は思うに弟子が欲しかったのだ。けれどもペルシャ語だの安南語などいうものは、先生の方が月謝を払つても習つてくれる者が無い。だから遂に見出したたった一人の弟子、栗栖按吉をいたわつてくれることといったら涅槃大学の梵語の先生も及ばないという風がある。

「その程度なら、君、語学を専攻するだけの^{てんぴん} 天稟がある」と、先生は梵語の手並をため

した上で、こんな思いついたお世辞を言う。涅槃大学校の梵語の先生と違って、決して笑わないから、言葉がみんなほんとのような気がするのだった。「ラテン大学の言語学科は全世界の天才が集ってくるが、中には丁度君程の才能しかない男がいたです。一年そこそこでその程度なら、日本では梵語学者になれるな」

先生の言葉はなんとなくあらゆる物に心安い感じを起させる。ラテン大学校の天才だの安南の哲学者だのネパールの王様だのというものが友達のような気がするのである。日本の梵語学者なんてものは、どうも、俺の弟子に当る男じゃなかったかな、などいう気持ちに
ついなってしまふのだった。

ところが先生は按吉に向つて、大いに見込みがあるからチベット語を伝授しようと言う。二十世紀に仏教を勉強するほどの者なら、先ずチベット語をやらなければ話にならない、と仰有るのである。梵語や巴利語の文献はいくらも残存していないが、仏教関係の文献は殆んど全部チベット語に訳されて伝わっている。だから仏教はチベットから這入らなければ二十世紀の学者として真物ほんものじゃないと仰有るのだった。

あいにく生憎なことに按吉はもはや印度哲学にそろそろ見切りをつけだしていた。とても悟りがひらけそうもないからである。頭の毛もそろそろ生え揃ってきたし、これを機会に印度

の方と手を切つて、仏蘭西とか独逸^{ドイツ}とか、ハイカラなところと手を握ろうなど考えだしていたのであつた。すでに印度界限にとんと情熱がもてないところへ、それが専門の帝大の先生でも、まだ文法もよくお知りにならず、辞書もお引けにならないと仰有る。なるほど辞書はひくために存在するのであるけれども、言葉は辞書をひくために存在するのではないようである。梵語やチベット語の辞書をひくのは健康に宜しく食欲を増進させ概してラジオ体操ほどの効果があるとはいふものの、辞書は体育器具として発売されたものではない。そこで栗栖按吉は大汗かいてチベット語の伝授を辞退することに努めたが、鞍馬先生という方は他人にも意志だの好き嫌いだのというものがあることなど、とんと御存じないのである。

「いや、君々」と先生は仰有る。「チベット語は仏教のために存在する言語ではないです。君、興味のない印度哲学は即座に止すべきところだね。そしてチベット学者になりたまえ。元来チベット語の話せる人は日本に四五人いるいないの程度だぜ。即ち君は六人目だな。一ヶ国語に通じることはその国土と国民を征服したことになるんだぜ。そうだろう。君」
 どうも先生の話はうますぎる。おだてには至つて乗り易い按吉だったが、言葉を征服すれば国土と国民を征服したことになるという、女の人に道を尋ねて女の人が返事をしてく

れば、女の人をわが物にしたことになるというのと同じようなものじゃないか。尤も按吉が六人目のチベット学者になりかねないのは正真正銘のところらしく、即ち帝国大学の先生が文法もよくお知りにならず、辞書もおひけにならないことでも大概察しがつくのであった。

丁度そのころチベット語の大家山口恵海先生の所説で、古来から高麗人こうらいびとと称よびならわしていた帰化人たちがチベット人ではないかという発表があった。現に高麗の言葉というウズマサ達のサイタマだのという地名がチベット語であるし、カグラ、サイバラがチベット語で、あの文章のヤというかけ声のようなものが卑猥な意味をもったチベット語だというのである。サンバソウがチベット語で「トウトウタリ」の全文がそっくりチベット語にほかならず、現にチベットに於ては、これとほぼ同じような踊りが行われていると言うのであった。

この程度にわが国の古い文化に密接な関係があつてみると、鞍馬先生のうますぎるおだてに乗るのは危険だと思ひながらも、つい六人目の学者になるのも満更ではなさそうだという大きな気持になるのであった。

さあ按吉がチベット語の伝授を受ける快諾をすると、先生の勇み立つこと、それ教科書

だ、辞書だ、文法書だ、参考書だ、チベットの事情に関する紹介書だ、これもやる、あれもやると按吉の膝の上へ積み重ねてくれる。と、按吉がこれをひそかに注意を怠らずにいたところが——というのは、これが相当問題が臭いからで——先生がこれらの書物を忙しく取り出してくる場所が、決して本箱の腰から上に当る場所ではないではないか。してみればこれはもう洗礼を受けたあれである。けれども学問の精神は遙か高遠なところにあるべきだから、按吉は膝の上の書物がたしかに湿つていても、これは神秘的な書物だから汗をかいているのだなと考える。印度では糞便の始末を指先でするほどだから言語も多少は臭いなど自ら言いきかすのであった。

ところが、不思議な因縁で、チベット語はたしかに臭いのであった。というのは、先生は大変放屁をなさる癖があった。伝授の途中に「失礼」と仰有つて、廊下へ出ていらつしやる。戸をぴしやりと閉じておしまいになるから、廊下でどのような姿勢をなすつていらつしやるかは分らないが、大変音の良い円々とした感じのものを矢つぎばやに七つ八つお洩らしになる。夜更けでも陰気な雨の日でも、先生のこの音だけはいつも円々としていて決して濡れた感じや掠れた響き^{かす}をたてることがないのであった。それから廊下をなんとなく五六ぺん往復なすつていらつしやるのは充分臭氣の消え失せるまで姿を見せまいという

礼節と思いやりの心から出た散策であろう。やがて部屋へ現れて、また「失礼」と仰有つて伝授をおつづけになる。

ここで筆者は日本帝国の国威のために一言弁じなければならないが、帝国大学の先生が辞書がおひけにならなくともそれは日本帝国の不名誉にはならないという事である。なぜならば、ラテン大学校の秀才も、やっぱり辞書がおひけにならないからであつた。先生は親切な方だから、生徒の代りに御自分で辞書をひいて下さる。按吉の面前でもものの二三分も激しい運動をなすつていらつしやるが、なかなか単語が現れてくれないのである。そのうち失礼と仰有つて廊下へ出ていらつしやる。屁をたれて、なんとなく廊下を五六ぺん往復なすつて、また失礼と仰有つて、辞書を抱えて激しい運動をなさる。やっぱり単語が現れない。

そのうち按吉はチベツト語の辞典といえは学者の健康のために作られたものではないかという風に考えていて、一分や二分で単語を探しだしてしまうのはチベツト語本来の性質にそむくものだという風に思っていたから、先生の激しい運動に対しても決して先生が出来にならないせいだなどと思うことはなかったが、然し先生が失礼と仰有つて廊下へ出ていらつしやる。なんとなく廊下を五六ぺん往復なすつて、また失礼と仰有つて戻つてい

らつしやる。その先生の礼節がしみじみといたわしく、大変^{わび}佻^{わび}しくてならないのだった。そこで按吉は或る日言った。

「先生、放屁は僕に遠慮なさることは御無用に願います。却^{かえつ}て僕がづらいですから」

すると先生はその次放屁にお立ちのとき障子を開けようとして手をかけてから按吉の言葉を思い出されたのであろう、それではと仰有つて振向いて、障子に尻を向けておいていつもの通り七ツ八ツお洩らしになった。そうして、その後はこの方法が習慣になったのである。ところがここに意外なことに、按吉は従来の定説を一氣にくつがえす発見をした。これに就いては物識りの風来山人まで知ったか振りの断定を下しているほどであるが、大きな円々と響く屁は臭くないという古来の定説があるのである。ところが先生の屁ときたら、音は朗々たるものではあるが、スカンクも悶絶^{けだ}するほど臭いのである。即ち先生がなんとなく廊下を往復なすつていらつしやったのは、蓋^{けだ}し自ら充分に御存じのところであつたのだらう。学問の精神は高邁^{こうまい}なものであるけれども、ここに於て按吉は、チベツト語の臭氣に就いて悲痛な認識をもたなければならなかった。その頃の按吉の日記の中の文章である。

外は晴れたる日なりき

今日も亦チベツト語を吸いて歸れりまた

この二行詩はいくらか厭世的である。先生の放屁にあてられて、彼は到頭とうとう思わぬ厭世感にかりたてられていたらしい。按吉はこの二行詩が出来上るまで詩というものを作ったことがなかったのである。ところが彼はこの時俄にわかにこの世には散文によつては表明しきれない何物かが在ることを痛切に知ったのである。即ちチベツト語と屁の交るところの結果の如き、これは散文の能力によつては如何いかんとも表明することが不可能ではないか。こうして彼は意外にもチベツト語と屁の交るところの結果から詩の精神を知り、また厭世の深淵をのぞいた。人間は、どこで、何事を学びとるかまことに予測のつかないものだ。

この伝授がもう一年間もつづいたら按吉は厭世自殺をしなければならぬような結果になつたかも知れなかった。ところが、ここに天祐神助てんゆうしんじよあり、按吉は一命をひろつたのである。

天祐神助は先生が童貞を失つたことに始まる。先生は花の巴里パリに於てすら童貞を失わず、マレーの裸女にも目を閉じて、堂々童貞を一貫し無事故国へ辿りたどついてきたのに、こともあろうに凡そ安直およな売春婦を相手にして、三十数年の童貞をあつさり帳消しにした。

その結果、次のような理由によつて、先生はまったく厭世的になつたのである。即ち先

生は按吉に言った。

「なんだ君。交接というものは実にあつけないものじゃないか。快感なんか、どこにあるのだ。君、そうじゃないか。馬鹿にしてやがる。僕は君、あの時だけは、世界中の言葉という言葉が総がかりになっても表現しきれない神秘的感覚があるのだと思いこんでいたんだぜ。僕は君、一生だまされていたようなものだ。僕はもう、つくづく都会の生活がいやになったな。くにへ帰つて、暫くひとりで考えてくる」

先生自体が神秘すぎて、按吉には、先生の厭世の筋道や内容がどうもはつきり呑みこめなかった。世界中の言葉という言葉が総がかりになっても表現しきれない神秘的感覚というものをどうして三十何年も我慢していらつしやったのか分らないし、その予想が外れたからといってどうして故郷へ帰らなければならないのかでわけが分らない。一生だまされていたなどと大変なことを言つて嘆いていらつしやるが、誰がどういう風に騙して^{だま}いたのだから一向わけが分らない。先生がこんな大変なことを言つて嘆いているのをきいていると、先生が言葉という言葉をみんな覚えようとしたのは、つまりそれを総がかりにしても表現しきれないようなことを、実はどこかに表現されているのだと感違ひしてせつせと勉強していたようにも思われるし、三十何年も童貞を守っていたくせに、実のところは先

生年中そのことばかり考え耽^{ふけ}つていたようにも思われるし、これはもうてんでわけが分らないのだ。

とにかく分らないことばかりだが、按吉の身にしてみると、これでとにかく、こっちの方は自殺がひとつ助かったという甚だ明朗な事柄だけが沁^{しみ}々分つてきたのである。青天白日の思いであつた。そうして先生が童貞を失つてくれたことを天帝に向つて深く感謝する思いによつて心は暫くふくらんでいた。先生の相手をつとめた売春婦にお礼を述べたいものなどと、忘恩的なことを一向に平然として考えているほどであつた。

尤も先生が童貞を失つてくれたおかげで、名誉あるわが帝国にはひとりの奇怪なチベツト博士が生れずに済んだという国民ひとしく祝盃を挙げなければならないような隠れた功績もあるのであつた。

その昔、泉州堺の町に、表徳号を社楽齋という俳人があつた。仙人になる秘薬の伝授を受け、半年もかかつて丸薬をねりあげて、朝晩これを飲んだあげく、もうそろそろ飛行の術ができるだろうというので、屋根の上から飛び降りて、腰骨を折ってしまった。

この時以来、できないことをするを「シヤラクサイ」ことをする、というようにな

つたという話である。

按吉は、時々深夜の物思いに、ふと、俺はどうも社楽齋の末裔まつえいじやないかなどと考えて、心細さが身に沁むようになっていた。若い身そらで、悟りをひらこうなどは、どう考えても思慮ある人間の思想じやない。第一、辞書だの書物の中に悟りが息を殺して隠れているということは金輪際ではないか。その昔、猿の大王だの豚の精だのひきつれて、こういう思想で、天竺てんじくへお経をとりでかけた坊主もいたけれども、あそこには生死をかけた旅行があつた。按吉ときては、電車にゆられて学校へ行くだけではないか。

第一、印度の哲人達を見るがいい。若い身そらで、悟りをひらこうなどと一念発起した青道心はひとりもない。どれもこれも、手のつけられない大悪党ばかりである。言語道断な助平ばかりで、まず不惑ふわくという年頃までは、女のほかの何事も考えるということがない。仏教第一の大哲学者は後宮へ忍びこんで千人の美女を犯す悲願をたて、あらかた悲願の果てたところに、ようやく殊勝な心を起した。これにつづく更に一人の大哲人は、母親を犯してのちに、ようやく一念発起した。おまけにこの先生ときては、天晴あつぱれ悟りをひらいて当代の大聖人と仰がれるようになってから、夢に天女と契ちぎりをむすんで、夢精した。これを弟子に発見されて有象無象うざうむざうにとりかこまれて詰問を受け、聖人でも夢と生理は致し方

がないものだ。フロイド博士に殴られそんなことを言つて澄している。徹頭徹尾あくどい聖人ばかりであるが、按吉は我身と社樂齋のつながりに就てひそかに心細さが身に沁むたびに、このことに就て、特にこだわらずにはいられなかった。社樂齋がいきなり仙人になることは先ず以て不可能だが、大悪党が聖人になることは確かに不可能ではない筈だ。

ところで、話は別であるが、印度の哲人とは違つた意味で、日本の坊主が、実に又、徹頭徹尾あくどいのである。

仏教の講座に出席する。先生方はみんな頭の涼しい方で、なかには管長げいか下もあり、衣をつけて教室へでていらつしやる。一切皆空を身につけて、流石さすがに悠々、天地の如く自然の態に見受けられたが、淡々として悟りきつた哲理の解説にも拘からず、悟りの明るさとか、希望とか、そういうものの爽快さを、どうしても感じる事ができなかった。そうして、それを感じさせない障しょうがい碍は、哲理自体にあるのではなく、それを解説していらつしやる先生方の人柄——むしろ、肉体（実に按吉はその肉体のみはつきり感じた）にあるのだと確信するより仕方がなかった。実に、暗い。なにかしら、荒涼として、人肉の市にさまようような切なさであつた。不自然で、陰惨だつた。

按吉は、時々、お天気の良い日、臍せいかたんでん下丹田に力をいれて、充分覺悟をかためた上で、

高僧を訪ねることが、稀にはあった。坊主は人の頭を遠慮なくぶん殴るという話で、三十棒といったりして、ひとつふたつと違うから、出発に際して、充分に覚悟をきめる必要なものがあつたのである。天日ためにくらし、とはこの時のことで、良く晴れた日を選んで出ても、道中は実にくらく、せつなかつた。けれども流石に高僧たちは、按吉のような書生にも、大概気楽に会ってくれたし、会ってみれば、実に気軽にうちとけて、道中の不安なものは雲散霧消が常だつた。そうして、各の高僧達は、各の悟りの法悦をきかせてくれた。けれども、ここでも、やっぱり人肉の市をさまようような切なさだけは、教室の中と変りがなかつた。

こういう立派な高僧方にお会いすると、どういうわけだか、人間とか、心とか、そういうものを感じる前に、いきなり肉体を感じてしまう。この世には温顔という言葉があるが、その実際が知りたかつたら、高僧にお会いするのが第一である。即ち、肉体は常に温顔をたたえ、さながら春の風、梅花咲くあのやわらかな春風をたたえていらつしやる。そうして、お別れしてしまうまで、肉体の温顔が、ただ、目の前いっぱい立ちふさがっているのである。そうして、肉体の温顔が、ニコニコと、きさくに語って下さるのである。十二、美女もただの白骨でな、と、肉体の温顔がニコニコと仰有る。又、あるときは、これを逆

に、イヤ、ナニ、美女のやわらかい肉感というものは、あれも亦よろしいものじゃヨ、と、
こう仰有つて大變無邪氣にたのしそうにニコニコとお笑いになり、あれにふれるとホンマ
に長生きするのう、と仰有るのである。

これと同じ意味のことは長屋の八さんが年中喋っているものであつた。けれども、長屋の
八さんはてんで悟りをひらかないから、八さんがこんなことを喋る時のだらしない目尻と
いったら洵に言語道斷である。実にだらしく相そうごう好くずしてヘツヘツとおでこを叩き、
忽ち膝を組み直したりするけれども、八さんの話をきいてみると、八さんの肉体などはて
んで意識にのぼらない。こつちも忽ちニヤニヤして八さん以上に相好くずして坐りなおし
てしまうのである。どうも悟りをひらかないてあいというものは仕方がない。夜の白むの
も忘れて喋り、翌日は、酒ものまずに、ふつかよいかかっている。

ところが高僧のお言葉ときては、そういう具合にいけないのである。こつちも忽ちニヤ
ニヤして、てもなく同感してしまうという具合にいけない。お言葉と同時に、先ず何より
も高僧の肉体が、肉体の温顔が、のっしのっしと按吉の頭の中へのりこんできて、脳味噌
を掻きわけてあぐらをかいてしまうのだ。按吉は、思わず目を掩おおう氣持になる。悟りのむ
らだつ毒氣に打たれた。時には瞬間慄然とした。

そのころ栗栖按吉に、ひとりの親友ができていた。龍海さんと云って、素性の正しい坊主であつたが、まだ高僧ではなかつたから、痩せ衰えた肉体をもち、高僧なみに至つてよく女に就て論じたけれども、てんで悟りに縁がないから、肉体の温顔などは微塵みじんもなかつた。

龍海さんは坊主の学校で坊主の勉強しなければならぬ筈であつたけれども、坊主の足を洗いたいということばかり考えていて、金輪際坊主の講座へでてこなかつた。そうして、絵描きになりたいのだと言つていた。生憎、龍海さんは貧乏な山寺の子供で学資が甚だ乏しいから、生きて食うのもようやくで、とても油絵の道具が買えない。水彩やパステルなどでトランク一杯絵を書いていたが、呆れたことには、女の姿の絵ばかりである。按吉は龍海さんを見くびつていたわけではないが、坊主の絵だから南画のような山水ばかり想像して、とにかく風景が多いだろうと思つていた。そこで、按吉は驚いた。むしろ唸つた。絵が名作のわけではない。何百枚の絵を見終つて、女以外の風景画が、花一輪すら、なかつたからに外ならなかつた。

「僕は、女のことしか、考えることができませんので……」

びつくりした按吉をみて、龍海さんは突然まっかな顔をして、うつむいて言った。龍海さんは素性の正しい坊主だから、どんな打ちとけた仲になっても、あなた、とか、あります、という丁寧な言葉を使った。

龍海さんは痩せ衰えて、風に吹かれて飛びそうな姿であつたが、凡そ執拗頑固な決意を胸にかくしていたのであつた。それは、油絵の道具をきつと買ってみせるという、小さい^{なが}乍らも凡そ金鉄の決意であつた。そこで食事を一食八錢にきりつめ、そのためには非常に遠い食堂へ行き、通学に四哩^{マイル}歩き、そうして貯金を始めたのである。愈々^{いよいよ}予定の額になつて、さて、油絵の道具を買いに行こうという瞬間に、盲腸炎になつてしまった。入院し、実に貧弱な肉体ですなア、と医学博士に折紙つけられた拳句の果に、貯金をみんな、なくしたのである。

龍海さんは意気消沈、まったく前途をはかなんでいたが、或る日、再び元気になつた。というのは、フランス帰りの放浪画家とふと知りあいになつたからで、この画家の話によると、巴里まで辿りつきさえすれば、あとは一文の金がなくとも、なんとか内職で生きのびながら絵の勉強ができるという耳りな話なのである。これは実際の経験談で、龍海さんを納得させる力があつた。

その日、ただちにその場から、忽然^{こつぜん}として、すでに龍海さんは貯金の鬼であった。一食八銭の食事も日に二度にきりつめ、あるときは一食にへらし、フラフラしながら学校へ来て、水のみ、拾った金も遠慮なく貯金した。

「今日、五十銭、拾いました。すぐ、貯金して参りました」

龍海さんは必ず按吉に白状した。まっかになって、うつむいて、白状した。龍海さんの気持としては、誰かに白状しなければならなかったに相違ない。巡査に白状するよりも、按吉に白状するのが便利であったのであろう。拾ったとき早速郵便局へ駆けつける用意ではあるまいけれども、懷中に、年中貯金通帳を入れていた。

こうして不退転の決意をもって巴里密航の旅費を累積しはじめたのだが、同時に、忽ち、栄養不良の極に達して、亡者にちかい姿になった。按吉は不安であった。今度は盲腸どころじゃない。念願の金 たまった瞬間に、幽明境を異にして、魂魄^{こんぱく}だけが水ものまず齒ぎしりして巴里へ走って行きそうな暗い予感がするのである。然し龍海さんは落ちついていて、目的のためには、栄養不良もてんで眼中におかなかった。

丁度そのころの話である。

龍海さんの先輩に当る一人の坊主——年の頃は四十二三、すでに所属の宗派では著名な

人で、管長の腰巾着こしぎんちやくをつとめており、何代目かの管長候補の一人ぐらいに目されている坊主であつたが、これが何かの因縁で、ある日、按吉と龍海さんを引きつれて、浅草のとある料理屋で酒をのんだ。

坊主が般若湯はんやとうをのむというのは落語や小咄こぼなしに馴染なじみのことだが、あれは大概山寺のお経もろくに知らないような生臭坊主で、何代目かの管長候補に目されている高僧こうそうは流石に違なう。却々なかなかもつて、八さん熊さんと同列に落語の中の人物になるような頓問とんまな飲み方はしないのである。

ここでも言いもらしてはならないことは、先ず、第一に、温顔であつた。この世に顔の数ある中で、温顔の中の温顔である。常に適度の微笑をふくみ、陽春の軟風をみなぎらし、悠々として、自在である。声はあくまでやわらかく、酔にまぎれて多少の高声を発するようないふこともない。洒脱しゃだつな応待で女中をからかい、龍海さんと按吉にさかんに飲ませ、自分は人につがえなければ強いて飲むということがなかった。

さて、ここをでて、何代目かの管長候補は二人の青道心をひきつれて、待合という門をくぐつた。

思うに何代目かの管長候補は、二人の青道心が、酔わないうちから女を論じ、酔えば益

々女を論じ、徹頭徹尾女を論じて悟らざることを夥おびただしい浅間しきをあわれみ、惻隱そくいんの心を催したのに相違ない。高僧はどのように、又、どの程度に、女色をたのしむべきか、という具体的な教育を行うつもりであったのだ。

芸者が来た。みんな何代目かの管長候補の長年の馴染で、芝居の話や、旅の話や、恋人の話や、凡そお経の話以外はみんなした。

深夜になって、一同、待合の一室で雑魚寝ざこねした。朝がきた。顔を洗って、着物を着代えて、何代目かの管長候補は女の襟を直してやったり、女の帯をしめてやったり、熟練の妙をあらわして、二人の青道心をしりえに瞠どうじやく若わかたらしめた。

龍海さんも按吉も、何代目かの管長候補の厚意に対して感謝しないわけではなかった。それはたしかに純粋な厚意であつたに相違ない。愚昧ぐまいな二人の青道心を、いくらかでも悟りの方へ近づけてやろうという、しかも芸者買という最も誤解され易い手段を用いて敢て後輩を導くという、容易ならぬことである。——けれども釈然とはできなかった。どうしても、なにかしら、割りきれない暗さが残った。

「なにかしら、割りきれないと思いますか」按吉は龍海さんに訊いた。

「割りきれません！ いい加減です！ 鼻持ちならない！」

そう答えて、龍海さんは、怒りのためにぶるぶるふるえた。二人はすっかり沈みこんで、がっかりしながら暫くめあてなく歩いていた。

あれぐらいのことをするなら、なぜ堂々と女と一緒にねないのだ。そういうことが先ず第一に考えられる。問題は、然し、決して、それではなかった。

たとい堂々と女とねても決して坊主は明朗にならない。按吉は思った。なにか割りきれない不思議な毒気は、単に女とねるねないの問題だけのせいではない。もつと、根本的なものである。坊主たちは、女を性慾の対象としか考えない。彼等が女から身をまもるのは、ただ、性慾をまもるだけの話である。

然し、俗人は女に惚れる。命をかけて、女に惚れる。どんな愚かなこともやり、名譽もすて、義理もすて、迷いに迷う。そのような激しい対象としての女性は、高僧の女性の中にはないのである。按吉は痛感した。どちらが正しいか、それはすでに問題外だ。迷う心のあるうちは、迷いぬくより仕方がないと痛感した。そうして、こう気がついてのち、肉体の温顔だとか、むらだつ毒気だとか、そういうものを持たない人を見直す、みんな今にも女のために迷いそうで、義理も命もすてそうな脆もろさがあるのに気がついた。

そんな一日。按吉は学校の門前で、一枚のビラをもらった。

トルコ語とアラビヤ語を一ヶ年半にわたって覚える。授業は毎日夜間二時間。そうして、一年半の後、メッカ、メジナへ巡礼にでかける。回教徒の志望者をつのるビラであった。

その日から、締切の最後の日まで、按吉は真剣に考えた。メッカ、メジナへ行きたくなってきたのである。

そのころ彼は、ちょうどある回教徒の聖地巡礼の記録を読んだ直後であった。巡礼者の大群はアラビヤの沙漠を横断して、聖地へ向って、我武者羅がむしゃらな旅行をはじめ。信仰の激しさが、旅行の危険よりも強い。そこで、食料の欠乏や、日射病や、疫えきびょう病で、沙漠の上へバタバタ倒れる。その屍体をふみこえて、狂信の群がコーランを誦しながら、ただ無茶苦茶に聖地をさして歩くのである。

思いきつて、沙漠横断の群の一人に加わろうかと考えた。そこに、命があるような思いがした。なにかノスタルジイにちかい激烈な気持であつたのである。

締切の日、彼は思いきつて、丸ビルへでかけて行つた。そうして、講習会場の入口へ来て、再び決心がつきかねて、三度その前を往復した。トルコ人が、彼を見つめて、講習会

場の扉をあけて、消えてしまった。

だが、彼はとうとう這入らなかった。トルコ人の姿が消えると、ふりむいて階段を降りた。その理由は――彼は丸ビルへくる電車の中で、すぐれて美しい女学生を見たのである。目のさめる美しさだった。彼の心は激しく動いた。

これでアラビヤへ行こうなどとは、大嘘だと思ったのである。そうして丸ビルの階段を降りながら、生れてはじめて本当のことをした感動で亢奮こうふんしていた。これから、いつも、こうしなければならぬ、と自分に言いかけながら歩いていった。

その日から、彼は悟りをあきらめてしまった。龍海さんは巴里密航の直前に、女に迷って、行方不明になってしまった。そうして、生死が、わからない。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1990（平成2）年2月27日第1刷発行

底本の親本：「炉辺夜話集」スタイル社

1941（昭和16）年4月20日発行

初出：「文体 第二卷第五号（五月増大号）」

1939（昭和14）年5月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：砂場清隆

校正：宮元淳一

2006年1月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

勉強記

坂口安吾

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>